

日本統治期における台湾茶の変容と台湾茶業の変遷

— 「茶」の持つ農作物と嗜好性の視点から

今野純子

目 次  
凡 例  
地 図

序論	11
(1) 問題意識	
(2) 先行研究	
(3) 研究課題・論文構成	
(4) 史料について	
第一部 台湾茶業社会の形成	
第1章 台湾烏龍茶の誕生と茶市場大稻埕（だいとうてい）の趨勢	
—「茶」の品質を通して—	
はじめに	22
第一節 外国貿易商の渡台と台湾茶	23
第二節 茶市場大稻埕の形成	25
第三節 外国貿易商による「台湾烏龍茶」の品質向上	26
(1) 台湾烏龍茶の製茶	
(2) 外国貿易商による品質鑑定と再製	
(3) 茶箱の改良	
第四節 厦門茶業の衰退と台湾烏龍茶の品質低下	30
(1) 厦門烏龍茶の台湾への流入	
(2) 茶産地の拡大と粗茶の品質低下	
(3) 外国貿易商と台湾烏龍茶の品質低下	
おわりに	36
第2章 薰花の「台湾包種茶」誕生と在ジャワ台湾籍民の茶商の勃興	
—「閩南語ネットワーク」の形成—	
はじめに	37
第一節 薰花の「台湾包種茶」	38
(1) 薰花の「台湾包種茶」の誕生	
(2) 包種茶と薰花	
第二節 香花作物産業の発展	40
(1) 香花作物の栽培事情	
(2) 香花作物と薰花の「台湾包種茶」	
第三節 在ジャワ台湾籍民と包種茶館の形成	44
(1) 在ジャワ華人と台湾籍民	
(2) 包種茶館の業務と費用	
(3) 在ジャワ台湾籍民の包種茶館と資本	

(4) 台湾人と包種茶館	
第四節 在ジャワ台湾籍民の包種茶館と茶商公会	49
(1) 在ジャワ台湾籍民の包種茶館と任意組合「台北茶商公会」	
(2) 在ジャワ台湾籍民の包種茶館と同業組合「台北茶商公会」	
おわりに	52
<b>第二部 消費地の嗜好と台湾包種茶の変容</b>	
<b>第3章 ジャワにおける、薫花の「台湾包種茶」の発展と変容</b>	
—1910年代から1920年代を中心に—	
はじめに	53
第一節 包種茶館による、薫花の「台湾包種茶」ブランド戦略	54
(1) 薫花の「台湾包種茶」と香花作物	
(2) 薫花の「台湾包種茶」と商標	
(3) スマラン植民地博覧会と薫花の「台湾包種茶」の宣伝活動	
第二節 ジャワ包種茶の誕生	61
(1) ジャワにおける製茶概観	
(2) 高級茶「台湾包種茶」と大衆茶「ジャワ包種茶」	
(3) ジャワ包種茶の製造	
第三節 チェリボンにおける二つの包種茶	64
(1) チェリボンと薫花の「台湾包種茶」	
(2) ジャワ包種茶と包種茶館	
(3) チェリボンと陳天來の「錦記」	
(4) ジャワ包種茶と薫花の「台湾包種茶」	
おわりに	69
<b>第4章 新たな消費地タイと台湾包種茶の諸相—1930年代を中心に—</b>	
はじめに	70
第一節 潮州茶館と焙煎の「台湾包種茶」	72
(1) 潮州茶館と武夷岩茶	
(2) 武夷岩茶と焙煎の「台湾包種茶」	
第二節 タイにおける排日運動と焙煎の「台湾包種茶」	74
(1) 済南事件と潮州茶館	
(2) 柳条湖事件と潮州茶館	
(3) 盧溝橋事件と台湾籍民	
第三節 タイにおける台湾包種茶の変容	78
(1) ジャワ向け薫花の「台湾包種茶」の失速と在ジャワ台湾籍民の衰退	
(2) 無香花の「台湾包種茶」とタイ	
(3) 微香花の「台湾包種茶」とタイ	

第四節	タイ国憲法記念祭博覧会と台湾包種茶	82
(1)	台湾包種茶の輸出振興とタイ	
(2)	タイ国憲法記念祭博覧会と在タイ台湾籍民	
	おわりに	84
<b>第三部 茶樹品種と茶農の知見</b>		
<b>第5章 台湾総督府の台湾茶品質改善策とその挫折</b>		
	はじめに	86
第一節	製茶の機械化による品質向上策	87
(1)	台湾総督府と台湾茶の出会い	
(2)	製茶の機械化と挫折	
第二節	品種による品質向上策	91
(1)	台湾総督府と品種の出会い	
(2)	茶農から学ぶ品種	
(3)	茶樹栽培試験場と品種の選抜	
(4)	茶農から学ぶ茶樹の繁殖法	
第三節	台北茶商公会と仲介業者	96
(1)	台北茶商公会と粗悪茶	
(2)	仲介業者の排除策	
第四節	台湾茶共同販売所の設置とその挫折	98
(1)	台湾茶共同販売所の設置	
(2)	茶棧と日早茶	
(3)	官民の視点と仲介業者	
	おわりに	102
<b>第6章 台北州閩南人と台湾包種茶の発展—茶樹品種「青心烏龍種」を通して—</b>		
	はじめに	104
第一節	茶樹品種「青心烏龍種」の優位性	105
第二節	台北州における青心烏龍種の拡張と台湾包種茶	107
(1)	台北庁（台北州）と青心烏龍種	
(2)	台北庁（台北州）と台湾包種茶	
(3)	台湾総督府「茶業奨励十年計画」と青心烏龍種	
第三節	台北州の篤農家と台湾包種茶独自の粗茶の誕生	109
第四節	茶農の技術向上策	111
(1)	台北州農会と茶農の技術向上策	
(2)	新竹州農会と台湾包種茶の製茶講習会	
第五節	茶農と製茶品評会	114
(1)	第一回「台湾製茶品評会」の開催	

(2) 台北州と製茶品評会	
おわりに	118
<b>第7章 新竹州客家人の台頭と台湾茶業の分岐—茶樹品種「青心大冇種」を通して—</b>	
はじめに	119
<b>第一節 二つのエスニックグループと台湾茶業</b>	119
(1) 閩南人と客家人	
(2) 新竹州客家人と台湾茶業	
<b>第二節 新竹州客家人と「青心大冇種」</b>	122
(1) 青心烏龍種と青心大冇種	
(2) 「青心大冇種」と新竹州客家人	
<b>第三節 「青心大冇種」と「凸風茶」</b>	125
<b>第四節 新竹州と「凸風茶」</b>	127
(1) 「凸風茶」の製法	
(2) 台湾総督府と新竹州の茶業奨励	
おわりに	129
<b>第四部 エステートと第三の台湾茶「紅茶」の誕生</b>	
<b>第8章 台湾総督府茶業伝習所と卒業生からみる台湾茶業への影響</b>	
はじめに	130
<b>第一節 台湾総督府茶業伝習所の設置と茶業教育</b>	131
(1) 茶業伝習所の設置	
(2) 茶業伝習所の指導内容	
<b>第二節 卒業生の出身地</b>	136
<b>第三節 卒業生の進路</b>	137
<b>第四節 卒業生と新竹州</b>	138
(1) 卒業生と関西庄	
(2) 卒業生と農業倉庫	
(3) 卒業生と台湾茶共同販売所	
<b>第五節 卒業生と日本との関わり</b>	141
(1) 卒業生と日本企業	
(2) 卒業生と八重山郡	
(3) 卒業生と魚池	
おわりに	148
<b>第9章 新竹州における紅茶の誕生と客家人によるエステート経営—茶樹品種「黄柑種」を通して—</b>	
はじめに	150
<b>第一節 新竹州と茶業振興</b>	151

(1) 第七代新竹州知事田端幸三郎と「州勢振興調査会」	
(2) 第十代新竹州知事内海忠司と「産業五箇年計画」	
第二節 黄柑種と「烏龍茶」	153
(1) 黄柑種と台湾包種茶の品質	
(2) 新竹州の茶産地と台湾烏龍茶の品質	
第三節 黄柑種と紅茶	156
(1) 黄柑種と「臨時産業調査会」	
(2) 黄柑種と紅茶の品質	
(3) 黄柑種と「産業五箇年計画」	
第四節 関西庄の紅茶と新竹州の発展	160
(1) 客家人羅一族とエステート経営の開始	
(2) 関西庄の紅茶産業の躍進	
(3) 新竹州の施策と紅茶品質の向上	
(4) 紅茶産業の躍進と新竹州	
おわりに	167
<b>第10章 「アッサム種」紅茶の誕生と日本企業の関与—ヤマチャからアッサム種へ—</b>	
はじめに	167
第一節 三井合名と紅茶	169
(1) エステートの誕生	
(2) 台湾烏龍茶から紅茶へ	
(3) 三井紅茶の誕生	
(4) 三井紅茶から日東紅茶へ	
(5) 日東紅茶とアッサム種	
第二節 台湾総督府と「アッサム種」紅茶	177
(1) ヤマチャからアッサム種へ	
(2) 茶樹品種「アッサム種」	
(3) 魚池紅茶試験支所の設置と「アッサム種」紅茶	
第三節 「アッサム種茶園の十ヶ年開発計画」と日本企業の進出	185
(1) 「アッサム種茶園の十ヶ年開発計画」	
(2) 「アッサム種茶園の十ヶ年開発計画」と日本企業	
(3) 「アッサム種茶園の十ヶ年開発計画」と中村圓一郎	
おわりに	189
<b>結論</b>	192
<b>参考文献</b>	200

## 【論文の要約】

当博士論文は、日本統治期を通して重要な輸出商品であった台湾茶に関与した、茶農、茶商、台湾総督府それぞれの「ヒト」の視点を軸に、「茶」の農作物と嗜好性という両側面から、台湾茶の変容と台湾茶業の変遷に関する考察を行うものである。

清代に誕生した台湾茶は、当初、半製品の粗茶のみが作られ、対岸の厦門で製造された厦門烏龍茶のかさましとして使われた。1860年代、台湾で製茶を開始したイギリスの貿易商は、「茶」が移送時に水分を吸収し劣化する特性に気づき、徹底した乾燥によって台湾烏龍茶の品質向上に努めた。その結果、台湾烏龍茶は誕生まもなく、消費地アメリカで需要を伸ばし、厦門烏龍茶を凌駕することとなった。市場を奪われた厦門烏龍茶は厦門茶業関係者の渡台を促し、台湾烏龍茶は量産が可能となったものの、余剰となった厦門烏龍茶が台湾へ流入し、新興茶産地で低質な粗茶が作られ、品質低下によって輸出が伸び悩んだ。

厦門茶業関係者の渡台は、新たな台湾茶として「台湾包種茶」を誕生させた。台湾包種茶は、外国貿易商が買い控えをし、余剰となり劣化した台湾烏龍茶の粗茶に花の香りを吸着したことが始まりとなる。薫花の「台湾包種茶」は香花作物産業を生み、在ジャワ台湾籍民が台湾茶業へ進出するきっかけとなった。在ジャワ台湾籍民の茶商の登場によって、「台湾茶」の主力商品は台湾烏龍茶から台湾包種茶へと移行し、茶市場大稲埕の主役もまた、外国貿易商から在ジャワの台湾籍民の茶商へと移り変わった。こうして、大稲埕を軸に、茶商、消費者、香花作物の従事者に至るまで、閩南語を紐帯とした「閩南語ネットワーク」が形成された。1910年代以降、「閩南語ネットワーク」は後背地である台北州の山地に住む閩南人の茶農へと拡張し、台北州が台湾包種茶の粗茶製造へと特化し、発展する要因の一つとなった。

当該期、台湾茶は茶農が山地で粗茶を作り、出来上がった粗茶は仲介業者によって大稲埕に運ばれ茶商に転売された後、茶商が火入れをするなどの再製を施し、商品となった。茶商は、主力商品や時代によって、外国貿易商や在ジャワの台湾籍民、短期滞在の中国人、台湾人や日本人へと移行したが、茶農は一貫して台湾に居住する台湾人であった。かかる茶農と茶商を介在したのが、複数の仲介業者であった。

台湾総督府は統治を開始してまもなく、台湾茶の品質向上のため、多額の予算を投じて仲介業者の排除策として「台湾茶共同販売所」の設置と、製茶の機械化促進として「製茶試験場」を設置したものの、半ば失敗に終わった。一つ目の仲介業者について、台湾総督府は台湾茶の品質低下と価格上昇となる、悪癖としか捉えていなかった。他方、茶農から見れば、仲介業者は茶農が節約のために炭を使わず、やむを得ず出来た粗悪な日早茶などを買い取ってくれる救済者であり、粗茶を即金で買い取り粗茶を大稲埕まで輸送してくれる、補佐的な役割を担ってくれる存在であった。結果、台湾総督府が行った「台湾茶共同販売所」は有名無実化し、仲介業者は存続し続けた。二つ目の製茶の機械化に関しても、品質向上には至らず頓挫した。それは、台湾総督府が「台湾茶」を単なる「世界商品」として捉えていただけで、「農作物」としての視点が欠如していたからであった。台湾総督府はかかる失策から、台湾茶の品質向上には、まず、「茶樹」そのものの特性を理解する必要があることを認識す

ることとなった。

「茶」はそもそも「農作物」であり、茶樹には優良品種と劣等品種がある。また、優良品種だとしてもそれぞれの性質が異なるため、混在した品種で製茶をしている限り、香りや味わいの均一性がなく、良質な「茶」とはならない。こうした茶樹の持つ特性に気が付いたのは日々、製茶をしていた茶農のみであった。かかる知見を茶農から学んだ台湾総督府の茶業技師は茶樹品種の研究を行い、優良品種の選抜を開始した。

1910年代以降、ジャワで薫花の「台湾包種茶」の輸出が急増する中、大稲埕の後背地であった台北州閩南人の茶農は、台湾包種茶の粗茶製造へと特化した。そもそも、台湾包種茶は売れ残り劣化した台湾烏龍茶の粗茶に花の香りを添加したものであり、その後も低品質な台湾烏龍茶の粗茶を台湾包種茶に使用した。台北州閩南人の茶農は「青心烏龍種」が台湾包種茶に最適な品種であることを見出し、茶樹品種の純血を守ることができる庄條法によって植樹した。また、台北州閩南人の茶農の中で「青心烏龍種」の特性を生かすために、茶摘みから製茶までを改良し、薫花せずとも花のような芳香を出す台湾包種茶の粗茶を作る篤農家が現れた。台北州は台湾包種茶の製茶講習会や品評会を開催し、かかる篤農家の製茶技術を台北州の茶農へと普及した。また、茶商で構成された台北茶商公会も、粗茶の品質改善が商品としての台湾包種茶の品質向上につながることを認識し、賞品授与を行うなど茶農と接点を持つようになった。こうして、台北州は「青心烏龍種」による、台湾包種茶の一大産地となった。

一方、傍流であった新竹州客家人は閩南語が解せず、山地で細々と台湾烏龍茶の粗茶を作る中、もう一つの茶樹品種「青心大冇（タイバン）種」が量産できる特性に気がつき、「青心大冇種」を植樹し続けた。その結果、1920年代には、新竹州客家人が台湾全島の粗茶生産量の3分の2を担うまでに成長しただけでなく、「青心大冇種」が夏に発生する浮塵子が茶葉に加害することによって優良な烏龍茶となることを発見し、「凸風茶」（ポンホン茶）の誕生へと繋がった。

1920年代に入り、台湾包種茶は従来の台湾烏龍茶の輸出量を凌ぐまでとなった。それは、在ジャワ台湾籍民の茶商が多額の資本をもとに、様々な香花作物のブレンドを行い、人の目に留まる商標によって、ジャワ人の嗜好に合った薫花の「台湾包種茶」を作ったからであった。1914年、スマラン植民地博覧会が開催された際、在ジャワ台湾籍民の茶商は主体的に活動し、薫花の「台湾包種茶」はジャワで認知度を高めた。強烈な芳香という嗜好性が強い薫花の「台湾包種茶」は、中毒性を備えている。薫花の「台湾包種茶」はジャワで定着する中、大衆茶から高級茶へと変貌し、模倣品としての安価なジャワ包種茶が誕生した。花の芳香と色鮮やかな「商標」という特徴を持った薫花の「台湾包種茶」はブランド化を図り易かった一方で、模倣もしやすかった。1920年代、模倣品のジャワ包種茶の誕生によって市場性を高めた薫花の「台湾包種茶」は、ジャワ包種茶に添加されるため、また、高級茶として存在するようになった。

同時期、台湾包種茶はジャワ以外にも販路があった。それが、タイであった。潮州の茶商



は製茶開始と共に渡台し、台湾で焙煎の「台湾包種茶」を作った。潮州人は従来、焙煎の烏龍茶、とりわけ武夷岩茶を好んだ。潮州の茶商は、タイに住む同胞の嗜好に合わせた武夷岩茶の模倣品として、強い焙煎の「台湾包種茶」を供給した。1930年代に入り、ジャワ向けの薫花の「台湾包種茶」の輸出が急速に減少し、無香花の「台湾包種茶」が余剰となった。かかる高級茶であった無香花の「台湾包種茶」の新たな販路となったタイでは、無香花の「台湾包種茶」の定着と共に、単一の香花作物で軽い薫花をした、模倣品としての安価な微香花の「台湾包種茶」の需要が生まれた。

1930年代に入ると、台湾では、茶樹の優良種が確定し、製茶が標準化された。かかる中、台湾総督府は台湾茶品質向上の最後の施策として茶業伝習所を設立し、台湾人の育成を開始した。茶業伝習所は従来の台湾烏龍茶や台湾包種茶だけではなく、紅茶の製造技術や評茶までも教授した。とりわけ、当時、世界市場を席捲していたインドやスリランカで生産されたアッサム種による紅茶の機械製造の実技指導を行った。最新の紅茶製造の技術を習得した卒業生は、新竹州や台中州で紅茶製造の技術者となり、その後の紅茶の発展に大きく寄与することとなった。

特に、茶業伝習所の卒業生の多くの出身地となっていたのが、新竹州関西庄であった。関西庄は「黄柑種」によって台湾烏龍茶の粗茶の一大産地となっていた。当初、「黄柑種」は他の品種に比べ量産はできたが、台湾包種茶には適さず、劣等種とされた。しかし、紅茶の製造が始まるにつれて、劣等種であった「黄柑種」が、紅茶には適した品種であったことが判明する。関西庄の客家人は、紅茶に適した「黄柑種」と茶業伝習所で習得した紅茶の製茶技術によって、台湾烏龍茶から紅茶の製造に切り替えた。羅家のような、自らが茶園と製茶工場を有するエステート経営者も現れ、新竹州客家人は紅茶の発展を契機に、台北茶商公会への参与を始め、台湾茶業を牽引するまでとなった。

一方、アッサム種の植樹が成功した台中州では、インドやスリランカが作っていた大葉種による紅茶製造が開始された。そもそも台中州には、在来種である大葉種「ヤマチャ」があり、アッサム種の植樹にも適していた。日本でも従来、アッサム種の移植が行われていたが、耐寒性のないアッサム種は日本の気候には適さなかった。台湾総督府は1940年、「アッサム種茶園十ヵ年開発計画」を策定し、エステートによるアッサム種の紅茶製造を推進した。日本企業もまた、台湾茶業へ進出し、念願であった世界の紅茶市場へと始動することとなった。